



リアディゾンの秘密 (その1)

たまに古文の話を書いてみよう。

受可自尊（リア・ディゾン？）の助動詞に「る・らる」がある。例えば、推量の助動詞の「む」には、「スイカカエ（推量・意志・勧誘・假定・婉曲）」と5つも「意味」があるとされるが、この助動詞は「話し手の、これからそうなるという判断を表す」ということで一括りにできる。彼がこれからそうなるだろうというのが「推量」で、自分がこれからそうするというのが「意志」、そして、君はこれからそうするといいいよというのが「勧誘」。假定・婉曲は、これからそうなるかもしれないと表現することで、判断を和らげるわけである。それなりに統一的に理解できることが分かるだろう。

ところが、受身・可能・尊敬・自発というと、この4つの「意味」にどういう関連があるのか、今一つ分かりにくいのではないだろうか。色々な考え方があるが、ここでは『広辞苑』や『古典基礎語辞典』の編者であり、日本語研究の第一人者であった大野晋先生の説を紹介してみよう。

＊

この四つの意味の根本は自発、つまり「自然の成り行き」を表すところにあります。日本人は物事を自然の成り行きととらえる傾向がかなり強く、また、成り行きであればしかたないとして容認する傾向が強いのです。例えば「会議の結論は…することになりました」と報告すれば人々はそうかと承認しますが、「委員会としては…することにしました」と報告すると、行き過ぎではないか、その考え

方には異論があるなどともめてきます。多くの日本人は、成り行きに従うことをもっとも安定したことと考えるのです。

また、次のようなことがあります。一つの物事が可能になると、「できるようになった」といいます。「デキル」の古形は「でくる」であり、「出来る」ということで、「出て来る」ということです。「出て来る」とは形をなして自然に現れ出てくることですから、日本人は「可能」を、奮闘努力の末に獲得することとは考えず、自然の成り行きとして「現れ出てくる」ととらえてきたわけです。

「デキル」の表す英語の can は、「知る」という意味の古代ゲルマン語 kannnigt(力)と同根の語です。また、ギリシア語そのほかでは、「力」を表す単語から「可能だ、できる」の意を表現する言葉が派生しています。これは「努力によって可能を獲得する」という考えを反映しますが、それらと比較する時、日本語の可能を表す「デキル（出来ル）」が「自然に出て来る」意であることは目立つことです。

おそらくこれは日本人が稲作民族であったことと結び付いた思考の習慣であると思います。稲作の豊穰は天候に大きく左右され、豊作を求めてどんなに人間が作為を加えてもその効は少なかったのです。「ものができる」「可能になる」ということは「出現してくる」ように自然の成り行きとして結果として現れました。だから物事は自然の成り行きとして成就すると考え、またそれに従っていくのがもっとも賢い行き方であると考えます。(続く)